

今年の「南風」は5期生が担当だそうで、5期生の子たくさん代表？（4兄弟）として屋良さとみ先生より話があり筆をとらせて頂きました。私は卒業後琉大第一内科に入局し、呼吸器を選択。卒後2年目に中部病院の呼吸器内科で半年研修、その後1年間近畿大学第4内科でアレルギーの勉強をさせて頂き、7年目に結婚しました。その頃、周りで女医さんの出産もあまり多くなく、妊娠中は当直もしてましたが、出産後はどのように仕事をしていいか不安でした。当時の医局長が週に1回から慣らしてみてもとの配慮で、老健施設で仕事を開始し、1年後からは毎日出勤で結局4年いた老健施設勤務中に3人目まで出産し働かせて頂きました。子どもの発熱などの際に両家の両親にもサポートしてもらいましたが、普段は、核家族で夫婦2人で送り迎え、育児、家事とめまぐるしく過ごしていました。職場が遠かったことと当直がない職場で一般外来をと思っていたところに、現在の職場である名嘉村クリニックの院長からお声をかけて頂きました。

名嘉村博院長は日本で初めて睡眠センターを立ち上げた先生で睡眠分野では知る人ぞ知る先生です。常勤医師9人で診療を行っており、糖尿病専門医師が4人、私と院長は呼吸器で、睡眠時無呼吸症候群やナルコレプシー、睡眠リズム障害、むずむず脚症候群、レム睡眠行動障害などの睡眠障害も診ております。院長がとても行動力のあるユニークな人で、沖縄の立地を活かして、韓国（ソウル大学）、中国（北京大学）、台湾、日本（京都大、金沢大、筑波大）の教授を招いて、沖縄でアジア睡眠カンファレンスを開催したり、睡眠学会や時間生物学会などの合同主催で万国津梁館で睡眠サミットを行いました。その事務局は名嘉村クリニックにありました。各国の先生方の講演に触れるたびに、奮起したり、英語が不慣れな自分におちこんだりと色々な経験をさせてもらっています。医局時代はあまり行わなかった学会活動や講演会での発表など色々な経験もさせて頂いています。睡眠学はまだ50～60年の若い学問ですが、生活に密着しており、すごく勉強になります。

自分の勉強もまだこれからですが、高校3年生の長男の大学受験を筆頭に息子4人の受験が毎年の様にあってまだまだ忙しい時期が続きます。少ないレパートリーの中から3～4人の弁当作りをしながら仕事している毎日です。ゆっくりできる日は来るかなあ～。

「リハ医の歩む道」

飯塚病院 リハビリテーション科 黒木 洋 美

医師となり25年目、希少（価値？）なりリハビリテーション（以下リハ）専門医である自分に原稿依頼があり、躊躇しつつも認知度の低いリハ医を知っていただければと思い書いています。私は琉大卒後、県立中部病院研修（内科、神経内科）を終え診療科を選ばず、学生時代にリハに興味があった自分を思い

出し鹿児島大学医学部リハ科に入局。中部病院で得た自信（何でも診れる！）は悉く壊れ、片麻痺患者が生活する『—食事や更衣、入浴動作の困難さをリハ医学の手法で自立へ—生き抜くサポートをする』という専門性を極めたいとリハ専門医を取得。その後は大好きな沖縄に舞い戻りリハ医を続ける傍ら、琉大細菌学教室（熱医研顧問岩永大先生の）にお世話になり大学院生活も経験しました。リハ医としては回復期～維持期（生活期）リハを経験し、12年前に福岡の飯塚病院へ赴任。動機は急性期リハは全国的にみても不十分・不確立でありそれにチャレンジしたい、かつ研修病院としても有名であり、リハ医療を多くの医師・研修医に知ってもらうのに適しているという考えでした。超急性期から生活期（維持期）、緩和におけるがんのリハまで経験しました。多数診療科、大勢の医師（現在＞240人）がいる中「リハとは？」の啓蒙から始め最初は苦労の連続でしたが、今では研修医が入院時の食事・処方箋とリハ処方箋はセット、という感覚で臨床教育が浸透してきました。マンモス病院（職員数＞2000人）ですが職種間で壁がなく前向きで非常に働きやすく、筑豊という少々片田舎にはなりますが経験を積むには良い病院と思います。（後期研修は門戸が広めでお勧めです）

実は住み慣れた飯塚を離れることになり、リハ過疎県といわれる地元宮崎で宮大整形外科に入局する形式でリハ医療の推進・啓蒙を残りの医師人生を懸けてみることに決めました。この時期に原稿を書かせて頂いた機会を感謝するとともに、今後もOBの先生方の連携やご指導等をお願いいたします。

卒後20年を超えて思うこと

豊見城中央病院 内科 玉 城 正 弘



琉大卒業生の皆様、こんにちは、5期生の玉城（タマシロ）です。学生時代はタマキと呼ばれていました。といいます。これまで、同窓会に対しては大した貢献もしていませんでしたが、今回、原稿依頼がありましたので、勝手気ままではありますが、少しばかり書かせて頂きます。

我々5期生も1991年に卒業し、早20年以上になりました。同期を含め先輩や後輩に教授、准教授、院長、副院長、部長の要職についているのをみると円熟を迎える年になったのでしょうか。そこで、本稿では私の想いを皆様に開示し共有できる機会にしたいと思います。

学生時代は、「熱血ボーイ」として医学部バスケット部に打ち込みましたが、不器用であり情熱的な「体育会系」ののりでその後の医師人生の前半を過ごしました。しかし、体育科系のノリは、価値観の押し付けになることもあり、悩むことが少なくありませ